

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

64

高橋 基

今回は、石狩川をせき止め、上川のアイヌの人たちを困らせようとした魔神・ニッネカムイ(nitnekamuy)を、文化神のサマイクル(samaykur)が征伐する伝説の前哨戦の「鬼の足跡」を紹介する。

前回は明治二十三年にカムイコタンを調査した永田方正(ほうせい)が、「ポロレブシペ(poro-rep-us-pe)大きい。沖についている・もの(=岩)の上流に、「イヤブテウシ(i-yapte-ushi)揚場(あげば)——荷物を陸揚する処なり」とした説を誤りであると指摘した。それは、知里真志保(ちりましほ)が、昭和三十五年発表の「上川郡アイヌ語地名解」で、永田方正のカムイコタンでの地名記載法を踏襲していながらも、ポロレブシペの上流の★印の「鬼の足跡」の地名解を記載したが、永田方正がこれを採録しなかつたというのも、「永田イヤブテウシ説」否定の根拠の一つであ

今回は、石狩川をせき止め、上川のアイヌの人たちを困らせようとした魔神・ニッネカムイ(nitnekamuy)を、文化神のサマイクル(samaykur)が征伐する伝説の前哨戦の「鬼の足跡」を紹介する。

る。それでは、知里真志保の二つの伝説のアイヌ語地名の地名解を見てみよう(写真は大岩の一番上から撮影)。

①「ニッネカムイ・オラオシマイ(ロ

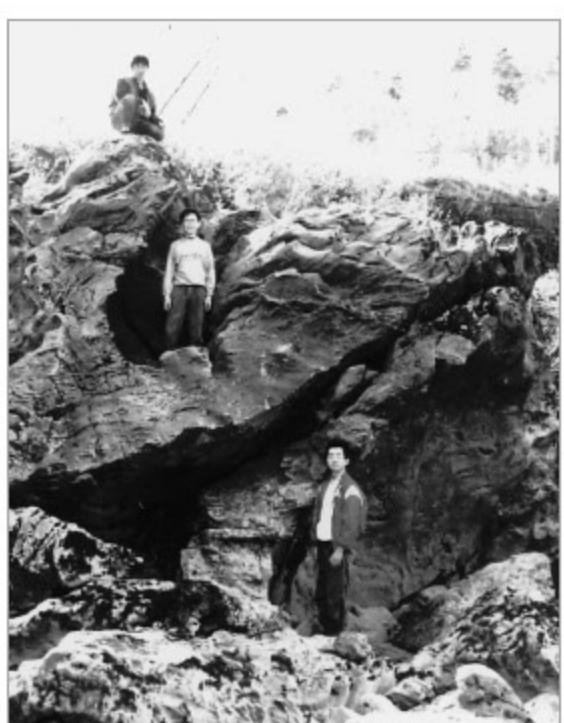
itnekamuy-o-rawosma-i 魔神
がそこで・ぬかつた・所)――神居古潭
の対岸(註――旧神居古潭駅側から見て
対岸→左岸)の岩に深さ一丈(註――約
三・〇三メトル)以上もある穴があり、魔神
が文化神サマイクルに追つかれられ
た時に踏みぬいた足跡だという」→
「鬼の足跡」

②「エムシケシ(emus-kes)刀の
端)――前記の穴のそばの岩の上に幾つ

—旭川のカム

録しなかつたというのも、「永田イヤ
ブテウシ説」否定の根拠の一つであ

The image is a composite of two photographs. The left side shows a traditional Japanese ink painting of a tree branch with dark, expressive strokes against a textured background. The right side shows a black and white photograph of three people standing on large, rugged rocks. One person is seated at the top of a rock formation, another stands in the middle, and a third stands at the base. The scene appears to be outdoors in a rocky, possibly coastal or mountainous area.



野帳『巳第二番』 「鬼の足跡」の大岩



Digitized by srujanika@gmail.com

旭川のカムイコタン

記録したのが松浦武四郎である。安政四年（一八五七年）、松浦武四郎は、カムイコタンを通る時に、持参した野帳（ライルドノート）に、写真のようない「鬼の足跡」の絵を描き、次のようによりモしている。この当時は、ニッネカムイは、鬼あるいは鬼神と表現していたことがわかる。

「ヲノエルシ一此二つ石に鬼が両足を入れしと云。凡おおよそ巾三尺七八寸（註一約一・二尺）、深さ二丈七八尺（註一約八・四尺）。一つは水干る時は貫て見ゆる。又其上に刀の切跡と云十文字の切味有。其上に又、手を懸し

『再窓石狩日誌』では、頭注に添画とともに、野帳とほぼ同文で記述している。また、一般向けに木版刊行されたダイジェスト版の『石狩日誌』では、次のように記述している。

「ヲナルシとは右の方に差し出たる大岩の上に座し、アイヌ等其下の渦巻たる深潭に括鎗遣う所なりと。傍に鬼の足跡(ニイツイカモイ)と云て凡三斗の井の如き穴三ツ程有。深さ何れも一丈余。又纔に五丈間を過てエモシケシと云は、山靈(カモイ)、鬼(ニイツイカモイ)を切らんとして此処に刃先を切込し所と云」

「甌穴群」として、旭川市指定文化財(天然記念物)となつてゐる。この甌穴に、「鬼の足跡」伝説が誕生したのである。

なお、松浦武四郎が採録した「ヲノエルシ」「ヲナエルシ」は、アイヌ文化研究者によると、「オノイエルウシ(o-no ye-ru-usi)」そこで・足をよじる・跡・所)→オノエルシ(o-no ye-rusi)」と読めると教えていただいた。

『再窓石狩日誌』では、頭注に添画とともに、野帳とほぼ同文で記述している。また、一般向けに木版刊行されたダイジエスト版の『石狩日誌』では、次のように記述している。

「ヲナルシとは右の方に差し出たる大岩の上に座し、アイヌ等其下の渦巻たる深潭に括鎗遣う所なりと。傍に鬼の足跡(ニイツイカモイ)と云て凡三圍斗の井の如き穴三ツ程有。深さ何れも一丈余。又纔に五六間を過てエモシケシと云は、山靈(カモイ)、鬼(ニイツイカモイ)を切らんとして此処に刃先を切出し所と云」

この「鬼の足跡」という岩穴は、「甌穴」と言われるもので、岩盤の窪みや割れ目に入った小石が、川の激しい水流で回転し、長い年月をかけて岩石を削つてできた円筒形の穴をいう。ここから下流一・二キロにわたり、「神居古潭甌穴群」として、旭川市指定文化財(天然記念物)となっている。この甌穴に、「鬼の足跡」伝説が誕生したのである。

なお、松浦武四郎が採録した「ヲノエルシ」「ヲナルシ」は、アイヌ文化研究者によると、「オノイエルウシ(O-no ye-ru-usi)そこで・足をよじる・跡・所」→オノエルシ(O-noye-rusi)と読めると教えていただいた。

『再窓石狩日誌』では、頭注に添画とともに、野帳とほぼ同文で記述している。また、一般向けに木版刊行されたダイジエスト版の『石狩日誌』では、次のように記述している。